

集合的トラウマと災害復興に関する理論的検討

—カイ・エリクソン『*Everything in its Path*』を読み返す—

Theoretical analysis of “collective trauma” toward a recovery of a disaster

— Revitalizing “*Everything in its Path*” in the Japanese context —

大門大朗^{*1}, 宮前良平^{*2}, 高原耕平^{*3}

Hiroaki DAIMON, Ryohei MIYAMAE, Kohei TAKAHARA

本論文は、カイ・T・エリクソン (1976) “*Everything in its Path*” で提起された概念「集合的トラウマCollective trauma」を現代の日本の文脈で読み返すことを意図し、理論的検討を図るものである。はじめに、本著における集合的トラウマとは、一般的な理解におけるトラウマ (心的外傷) つまり、個別的トラウマIndividual traumaとは異なり、個人が依拠する共同体との結びつきの喪失による外傷を指していることを説明する。次に、本著がアメリカにおいて、心理学的には (個別的) トラウマの二次的な症状として位置づけられ (集合的トラウマの個人化)、社会的には社会構築主義における歴史的・国民的トラウマと比較し自然主義に陥っていると批判されてきたこと (集合的トラウマの社会化) を説明する。最後に、集合的トラウマを個人の「心理」や当事者から過度に逸脱した「社会」に帰すことなく、被災地がかかえる共同性 (Communitality) に着目することで、東日本大震災後の嵩上げ工事や福島原発事故の故郷喪失といった日本の問題においても「集合的トラウマ」が可能性を秘めた概念であることを提示する。

キーワード: 集合的トラウマ、災害復興、カイ・エリクソン、バッファロー・クリーク洪水

Keywords: Collective trauma, Recovery of a disaster, Kai Erikson., Buffalo Creek flood

1. はじめに

バッファロー・クリークの被災者が体験している外傷的症状の大半は、共同体の喪失に対する反応なのであり、災害それ自体に対する反応に並行して生じているものである。(Erikson, 1976=2006, p.194)

本論文は、社会学者カイ・T・エリクソン (以下、エリクソン) による、バッファロー・クリーク洪水災害 (1972年) の報告書である『*Everything in its Path*』¹⁾ (1976年、以下EiiPと表記) と、同書で提出された概念である「集合的トラウマ」に焦点を当て、その概念を現代的な文脈から捉え直すことで、その理論的再検討を企図するものである。

エリクソンは1931年にエリク・エリクソン⁽¹⁾の息子として生まれた。シカゴ大学で博士号を取得した後、マーシャル諸島での水爆実験やスリーマイル島原発事故、エクソン・ヴァルディーズ号原油流出事

故といった事件の研究を行っている。アメリカでは人的災害に関する研究の第一人者として知られている。その中でもEiiPは長期間のフィールドワークを元に書かれた書籍であり、「集合的トラウマ」は同書を中心概念として初めて提起された。

概念的な検討に入る前に本書の記述対象となっている災害を簡単に説明しておこう。この災害は、1972年2月26日にアメリカ・ウェストバージニア州のバッファロー・クリーク地域で発生したダム決壊事故である。この決壊事故により125名の犠牲者が出、溢れた水によって、周辺の町は壊滅的な被害を受けた。

この災害の特徴は、炭鉱施設からの廃棄物によってできたいわゆる「ぼた山」がダムとなり、豪雨によってそれが決壊した点である。したがって現地で操業していた鉱山企業が決壊事故の責任を負うべきものであるが、被害を受けた人々の多くがその鉱山企業で働いていたことで問題は複雑化した。

^{*1} 京都大学防災研究所 日本学術振興会特別研究員 (CPD) ・博士 (人間科学)
Research Fellow (CPD), Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Dr. Human Sci.

^{*2} 大阪大学人間科学研究科 助教・博士 (人間科学)
Assistant Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Dr. Human Sci.

^{*3} 人と防災未来センター 研究員・博士 (文学)
Researcher, Disaster Reduction and Human Renovation Institution, Dr. Letters.

この災害のもう一つの特徴は、家や町が一瞬にして決壊したダムの水によって押し流され、住民の日常生活が喪われたことである。結果、人口5000人ほどの谷間の炭鉱町で、約4000人が家を失うことになった。被災者が語る濁流の描写や、故郷を喪失することへの悲嘆は、日本国内の津波災害を想起させるものでもある。

被災者が原告団となり鉱山企業を相手取った訴訟が提起された。その原告団の弁護士事務所から依頼され、住民の被災状況の調査のためにバッファロー・クリークに訪れたのが社会学者であるエリクソンであった。EiiPはその際に聞き取った500名を超える膨大なインタビューと綿密なフィールドワークから執筆された。そのため同書は単なる裁判用の被災地報告にとどまらない、すぐれたエスノグラフィーともなっている。

2. EiiPにおける集合的トラウマ

まず本節では、EiiPにおいてエリクソンが論じている「集合的トラウマ」概念の内容を同書の記述に沿いつつ説明する。なお、特別な断りのない場合、引用頁は全てEiiPからのものである。

2-1. 個別的トラウマ

EiiPでは、バッファロー・クリークの被災者が洪水災害によって負った精神的影響を、「個別的トラウマ*individual trauma*」と「集合的トラウマ*collective trauma*」の2種類に分けて分析している。本稿が論じるのは、後者の「集合的トラウマ」概念であるが、概念整理のために、まず前者の個別的トラウマに関する記述を紹介しておきたい。

著者による個別的トラウマの定義は以下である。

個別的トラウマとは、精神に対する打撃を意味する。そのひとの防衛機制をあまりに突然に、強烈な力でもって突破してしまうために、効果的に反応することができないような打撃である。これは、臨床医が通常、トラウマという言葉を用いるときに思い浮かべるものであり、バッファロー・クリークの被災者たちはまさにこのトラウマを経験したのである。かれらは死と破壊にさらされた結果として深い衝撃を受けた。そして、こうした凄惨な破局においてしばしば起こるように、かれらは自らのうちに引きこもり、麻痺や恐怖や脆弱さを感じ、きわめて孤独となった。(pp. 153-154)

個別的トラウマとは、一般に臨床家が言うところ

の「トラウマ」である。心的な把握能力を大きく超える突然の出来事の知覚であり、被災者はそれに対して「効果的に反応することができないcannot react to it effectively」。ここで言われる「効果的な反応」とは何だろうか。本書の証言によれば、被災者(survivors、生存者)は、濁流に呆然としつつも、とにかく身体を動かして洪水から逃げ延びている。したがって生命を守るための行動という意味では「反応」に成功している。問題は、危機的状況から脱出した後、生活を再建してゆく過程にある。エリクソンの観察によれば、被災者は「麻痺や恐怖や脆弱さ」や「孤独」の感覚から抜け出せずにいた。体験がもたらす負の情動は、普通、時間とともに減衰してゆく。それは精神の「効果的な反応」の処理のおかげである。ところがバッファロー・クリークの被災者はその反応プロセスに進むことができないでいた。それは次の生存者の証言にあるように、「打撃a blow」の本質が「死と破壊」によるものだからである。

「2軒隣に住んでいた女性と、その長男と娘さんも溺死でした。かれらが流されてゆくのを見ました。かれらもわたしの名を呼びました。[...] 上流側の5軒の家が流れて、そこで14名が溺れて亡くなりました。そのひとりひとりが流れてゆく家のなかにいるのを、わたしは見ていました。[...] /流された自宅に入ってみると、わたしと妻のベッドの上に、小さな子どもの半分にちぎれた遺体がありました。体の大きさは8歳から10歳くらいに見えました。ピックアップ・トラックがリビングに流れ込んでいて、車内に遺体がありました。瓦礫にまみれた遺体が自宅のそばに2体ありました。わたしは家の中に入るためにかれらを跨がなくてはなりませんでした。」(pp. 140-141)

この生存者は災害後2年経って安全な場所に引越してからも次のような心理状態にあった。

「ニュースを聞いて、嵐の予報があると、なぜかその日は眠ることができません。ずっと起きています。妻に『小さい子たちを着替えさせず、昼間と同じ格好で寝かせよう。もし何か起きたら、家の外に逃げる時間が充分確保できるようにわたしがおまえを起こすよ』と言います。わたしはベッドに入りません。起きています。/この神経がわたしにとっての問題です。雨や嵐にいつも耐えられません。部屋をうろつきます。とても神経質になって発疹が出ます。[...] /いまは丘の上に住ん

でいますが、恐怖を拭い去ることはできません。雨が降ると、嵐になると、いつもフラッシュが点くのです……午前2時でも3時でも。」(p.143)

このように、個別的トラウマとは凄惨な災害体験に起因する直接の心理的反応である。エリクソンのその記述の緻密さは、PTSD成立(1980年)以前の心的外傷の描写として、カーディナー²⁾やリフトン^{3), 4)}に並ぶものである。

2-2. 集合的トラウマ：共同性を失うということ

次に、集合的トラウマの定義はどうか。

これに対して、集合的トラウマとは社会生活の基本的組織に対する打撃を意味する。この打撃は、ひとびとを愛着をもって結びつけている絆に損傷を与え、共同体のうちに生きているという一般的な感覚を傷つける。集合的トラウマは、それをこうむるひとびとの意識にじわじわと作用してゆく。潜行的にとってもよい。だからふつう「トラウマ」ということで連想される、突然さという性質を持たない。しかしそれでもやはり集合的トラウマは衝撃の一形式である。それは、支え合いの効果的な源泉effective source of supportとしての共同体がもはや存在せず、自己の重要な一部が消失してしまったことの段階的な自覚なのである。(p. 154)

災害は「社会生活の基本的組織」、すなわち家族、近隣関係、仕事仲間、大小の集落、「バッファロー・クリーク」という郷土意識にも打撃を与える。依存、信頼、相互のケア、生活リズムの協調といった、災害前には当然のように保たれていた人間同士の愛着関係が失われる。ひとは世界の事物を取り扱うだけでなく、他者と人格的な関係を取り結ぶことで生きている。この関係はまた、その土地の歴史・風土・宗教感情といった環境に支えられている。集合的トラウマは、この関係と環境の総体がまるごと消失したことへの反応である。

日常生活下の喪失体験においては共同体が「支え合いの効果的な源泉」としてはたらく。すなわち喪失や外傷的体験からの回復を共同体が下支えしうる。だがその共同体そのものが失われたとき、関係を再建するための余力を得ることができなくなってしまう。

こうした「共同性communality」への打撃の現れは、苛烈な破局的体験とその反応という個別的トラウマの構図による分析では、かえって隠れてしまう。個

別的トラウマの分析は、ハザードそれ自体の体験と現在の「症状」を、トラウマ的記憶という原理で結びつけることで成立する。これに対して、集合的トラウマは、被災者の現在の苦境と、かれらの災害以前の生活環境を対比することで初めて現れてくるものである。言いかえれば、個別的トラウマはハザードそのものの記憶と現在の生との連関であり、集合的トラウマはハザード以前の生の総体的記憶と現在の生との連関である。そして、ハザード以前の生の記憶のなかでも最も取り戻し難い要素として現れるのが、人間同士の関係という集合的な在り方である。

この点に関してエリクソンが緻密に描き出すのが、バッファロー・クリークの洪水以前の濃密な共同体生活である。

「わたしたちはひとつの大きな家族のようでした。だれかが傷ついたら、全員が傷つきました。いつもみんなが同じ存在だったということなんだと思います。どう説明したものかわかりません。気分のよいものです。友人以上のものです。だれかが傷ついたら、全員が気にかけてました。全員が、です。だれかが家族の一員を亡くしたなら、みんながつねにいっしょにいました。だれもがそばにいて、食べ物を持ってきてあげよう、助けてあげようと思いました。とても深い思いやりでした。」(p. 188)

バッファロー・クリークの住民は、この共同体の在り方を「隣人neighbor」と表現する。

「災害の前までは、隣人がなにか困っていたり、体調を崩していたり、心配事を抱えていたりしたら、すぐにわかりました。部屋の明かりでもピンとくるのです。夜おそくまで部屋の明かりがついていたら、いつもと違うことが起きてるみたいだと気づきました。そういうときは実際にその家に行ってみます。とても寒い日に仕事から戻ってくると隣人neighborが温かいスープをつくって待っていてくれたということも一度や二度ではありません。あなたにはなかなか想像つかないでしょうけれど、ほんとうにそうしていたのです。[…]こういうことは他ではありえないでしょう。いっしょに育って、なんでもいっしょに経験してきた仲間とはこういうものです。隣人neighborとはそういう関係です。」(p. 190)

これらの証言からわかるように、「隣人neighbor」は、空間的な近接性以上に、生活を相互依存する親

密な関係性を意味する言葉である。また、バッファロー・クリークは坑夫たちの集落であり、住民は基本的に同じ職場仲間とその家族であったことも、この「隣人」共同体の形成を後押ししている。

こうした親密な共同体は、その内部の人々にとって、ある種の「備蓄庫store」として働いていたとエリクソンは指摘する。同地では、農機具や自動車といった目に見える資源を貸し借りし、また育児や看護や葬儀などお互いに助け合うというように信頼関係に基づいた労力の融通が日常的に行われていた。共同体の構成員は、必要なときに共同体からこうした資源を引き出し、また自身の所有物や労力を共同体に提供する。言い換えれば、構成員は共同体に常に「投資」している。こうした「備蓄庫」としての共同体は、アパラチア山地の厳しい風土を生き抜くために必要なものだった。しかし洪水災害でそれが失われたとき、住民は長年「投資」してきた「備蓄庫」を失った。いつもならばその備蓄庫から資源を引き出して事件を乗り切っていた人々は、共同体を失って全く寄り添えない状態に陥ったのである。

共同体が人々に提供していた資源は、物品や労力といった、外部から導入可能・交換可能なものだけではない。エリクソンの観察と分析は共同体を剥ぎ取られた住民の訴えを鋭敏に読み取ってゆく。災害後の住民は関係を再構築すること自体に困難を感じていた。他者を助け、それとなく気遣い、休日を共に過ごし、いたわりのことばを掛け合うといった、より微細なやりとりができなくなる。

「とても団結力のある、仲の良い隣人関係でした。お互いに仲間意識を持って、気遣いあっていました。生きてゆくのに良い土地でした。でもいまは、街中での暮らしに似てきています。だれもが自分ひとりのことに精一杯で、だれもがちょっとばかり傷ついているみたいです。もう同じではありません。根っこが全部はぎとられてしまいました。」
(p. 223)

共同体はこうした相互の気遣いや配慮を成り立たせるための地盤でもあった。住民たちは自身の立ち位置や将来のことを見定めることができない「失見当disorientation」の状態に陥り、生活再建の意欲を失ってゆく。

住民にとって、「隣人」関係は「生命の基本的事実」(p. 215) だった。その関係は随意に設置・除去できるものではなく、風土や歴史といった環境と密接に絡みついている。踏み込んで言えば、それは環

境・風景と化している。そうした関係にある環境・風景が消失してしまうことは、被災者にとって、世界そのものの変化として感じられる。

「自分が以前と同じ人間だと感じることはできません。違う世界に住んでいるかのようなのです。帰る家がないのです。どうしたって、いつもどおりという感じを持ってません。つまり、自分は人間だろうかと感じるときもあります。ひとりも友達がいなくて、だれも自分のことを気にかけてくれないと感じてしまうのです。」(p. 214)

後の論考でエリクソンは、集合的トラウマは個別的トラウマを負った人の集合体とは別の概念であることを強調している⁹⁾。つまり、集合的トラウマは人間が持つ社会性や、エリクソンの表現を使えば「共同性」といった側面に対する打撃、あるいは人間が社会性やつながりを持つからこそ被る打撃であり、個人と共同体が取り結ぶ構造において生じる苦痛である。それはただ不便とか寂しいというのではなく、自己の生の一部が剥ぎ取られ、生の感覚が脅かされている状態である。

また、ここで注意しなければならないのは、エリクソンが共同性(コミュニティ)というとき、明確に共同体(コミュニティ)と区別して用いている点である。エリクソンが集合的トラウマを導入する章において、両者を明確に使い分けている箇所を抜き出そう。

本章では「共同体community」ではなく「共同性communitality」という用語を用いている。共同体を失ったことについて住民が嘆いているとき、かれらが村落の特定の領域について言っているのではなく、人間が生きるための一般的な環境としての人間関係の網目のことを言っているということを強調したいがためである。この網目の中心をなしている人はふつう「隣人」と呼ばれている。(p.187)

ここでは、集合的トラウマが生じる上で本質的なのは、共同体そのものが失われるということにあるというよりも、その共同体が把持していた「つながり(=共同性)」が失われることにあるということである。確かにそれは共同体を要件とする。しかし、集合的トラウマ(外傷)が生じるのは、ひとびとが置かれた共同体の背後にある環境、あるいは人間関係の網目においてである。そして、バッファロー・クリークで破壊されたのは、住民が口にする「隣人」関係であった。

だが、集合的トラウマが、人間関係の（網目の）喪失だけを指してはいない点には留意すべきである。エリクソンは、バッファロー・クリークで破壊された家や家の中に大切にしまわれていたもの（例えば、父の遺品銃や写真）を「調度品という自己furniture of self」と表現している。この含意は、バッファロー・クリークの人たちにとって、自らの所有物が失われることは、単に物の喪失以上の意味を帯びているということである。それは、自己の分身、あるいは自己の存在証明とでも言えるものとしての「物」が失われることを意味している。エリクソンは、確かに、共同性の議論中で、人間関係を重視しているように見える。しかし、そこで見落としてはならないのは、人間関係を含みこんだその共同体の総体とでも言える環境や風景に目を向けるということである。

2-3. 集合的トラウマと個別的トラウマの関係

ここまで、EiiPにおける個別的トラウマと集合的トラウマの記述を追ってきた。ここで、両概念の区別をさしあたり表1にまとめておく。では、個別的トラウマと集合的トラウマはどのような関係にあるのだろうか。いずれか片方のみが生じる場合もあるとエリクソンは言う。例えば、交通事故で精神的打撃を受けたが共同体との接触を維持している場合は個別的トラウマのみであり、スラム一掃プロジェクトにより共同体が剥ぎ取られたと感じている人々は集合的トラウマのみを負っている。バッファロー・クリーク洪水災害の場合、2種の外傷が並行して生じており、さらに集合的トラウマによって個別的トラウマの回復が阻害されていることにエリクソンは注意を向ける。

表 1. 個別的トラウマと集合的トラウマ

	個人的トラウマ (Individual trauma)	集合的トラウマ (Collective trauma)
対象	精神	社会生活の基本的組織
性質	衝撃的・突然に	段階的・じわじわと
症状	災害それ自体に対する 心理的反応	コミュニティの喪失に 対する反応
原因	凄惨な黒い水流に遭遇した衝撃	生活に意味を与えていたコミュ ニティが剥ぎ取られたこと
境界線	個人の周囲	集団の周囲
語り	麻痺させられている心について	コミュニティに譲り渡した 自分の人生について

2種のトラウマは、それを負う人の、生き活きたした生の感覚が損なわれることにおいて共通している。個別的トラウマは、災害体験が強烈で突然であったために生じる心理的・神経生理学的プロセスである。集合的トラウマは生活に意味を与えていた共同体そのものが破壊されたために生じる社会心理的

プロセスである。この二つのプロセスは、当事者においては区別されずに体験されている。

エリクソンの立場として強調すべき点は、被災者の証言を、災害の破局的体験のみに結びつけて解釈するのではなく、災害以前からの民俗誌・生活誌にまで視野を広げて解釈することで初めて、被災者が失っているものの全体像が外部者に理解されるようになる、という点である。隣人とのつながりを失ったためにかつての自分自身であることができない、違う世界に生きているようだと叫んだバッファロー・クリークの住民の証言を聞くことは、被災当事者を「症状」の所有者としてではなく、災害以前から生きてきたひとりの人間として全人的に理解することである。それは濁流からの脱出といった破局的体験を聞き取るだけでは現れてこない。そうした証言は、被災者個々人の個別の物語に細分化されるようでありつつ、かえって根底的な共通性を示す。

言い換えれば、個別的トラウマの発生メカニズムのみによって集合的トラウマを説明することはできないということである。あるいは、仮に集合的トラウマを個別的トラウマにすべて還元させるモデルを前提として被災者の証言を解釈すると、そこに含まれる多くの要素を聞き落としてしまうだろう。以上が集合的トラウマの本質である。

3. アメリカにける集合的トラウマの受容

前節で詳述した「集合的トラウマ」が提出されてからすでに半世紀近くが過ぎ去った。このことを踏まえ、本節では、特にアメリカにおける集合的トラウマの受容と批判に着目し、その概念を鍛え直すことを試みる。本節の結論を先取りすれば、集合的トラウマへの批判は、大きく分けて二つの論点に整理できる。第一に、心理学的には（個別的）トラウマの二次的な症状として、付随的な位置におかれたこと（集合的トラウマの個人化）である。第二に、社会学的には社会構築主義における歴史的・国民的トラウマと比較し自然主義に陥っていると批判されてきたこと（集合的トラウマの社会化）である。

まず、EiiPの出版後の状況を量的な形で把握しておきたい。EiiPの影響を測る指標として、図1に、初版が発行された1976年からのEiiPの引用回数を示した。なお、グラフは、全ての引用記事を網羅できていないものではないが、近年の傾向を相対的に把握することは可能である。なお、本書は、2006年に再版されており、図1は、再版分も含んだものとなっている。この図からは、2006年の再版以後に、引用

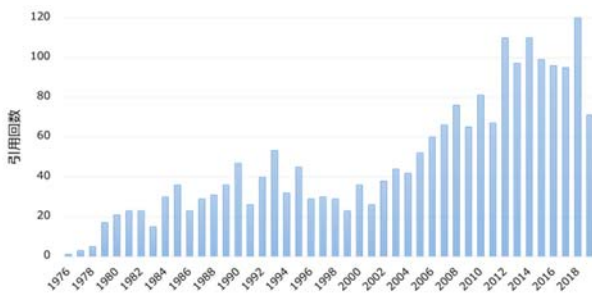


図1. 『Everything in its Path』の引用回数
(Google Scholar を用いグラフ化。2019 年は
9 月までのデータを使用している。)

回数が増え、概せば、EiiPは2000年代になって、更に読み返されるようになったと言える。

もちろん、トラウマ研究については、精神医学や心理学の領域において膨大な蓄積がある。しかし、このEiiPの引用回数の増加は、トラウマを単に個人に帰すのではなく、社会との関連の中で捉えようとする2000年代後半からの社会学や人類学の流れと相即的である⁶⁾。こうした流れの中に、エリクソンのEiiPが位置づけられたものと考えられる。ただ、その位置づけは、トラウマを個人に帰そうという流れから脱するための概念の一つ、つまり、他のそうしたトラウマ概念と並列された位置づけに留まっている。その例としては、国民的トラウマ⁷⁾、歴史的トラウマ⁸⁾、文化的トラウマ⁹⁾などが挙げられており、集合的トラウマは、こうしたトラウマ論者からの批判対象にもなっている。

実際に、エリクソンの専門でもある社会学において、集合的トラウマは、出版当初は自然災害の中であまり適用されてこなかった。社会学の文献データベースであるSociological Abstractにおいても、出版後の70年代～90年代にかけて集合的トラウマが言及された論文は16本に過ぎず、こと人的災害(事故や戦争など)において議論されただけであった。だが、2000年代には91本、2010年代には158本と急増しており、その内訳を見れば、自然災害での言及が増えている。このことは、2005年のハリケーン・カトリーナにおいて、アメリカ国内での帰還困難民が一つの問題となっていたことから、故郷の喪失と集合的トラウマの関わりという文脈で読み返された¹⁰⁾、¹¹⁾ものと思われる(研究レビュー¹²⁾、¹³⁾も参照せよ)。

こうした背景を踏まえ、集合的トラウマが、どのようにして批判的に解釈されたのかについて、二つの方向から整理しておきたい。第一の方向では、心理学の分析的概念の一つとして、通常トラウマ(エリクソンのいう個別的トラウマ)の後に引き続

いて起こる「二次的トラウマ」¹⁴⁾として集合的トラウマは解釈された。つまり、個別的なトラウマの症状に対して、慢性的・長期的に生じるものとして提示された集合的トラウマは、時間的に引き続いて生ずる「二次的な」トラウマであるという指摘である。例えば、ハリケーン・カトリーナ後に行われた被災者の分析において、次のような一文に象徴的に現れている。

ハリケーン・カトリーナに晒された個人の心的外傷後ストレス症状(PTSS)¹⁵⁾に対して、自宅の被害が重要であったということは、コミュニティの喪失、新たな家を探すのに多少手間取ったこと、避難者への政府による住居支援の遅延や先行きの不透明さに結びついた「二次的トラウマ」によるものかもしれない。(p.155)¹⁵⁾

この意味で、第一の方向においては、集合的トラウマはむしろ、個人を念頭においた心理学に強く引き寄せられる形で再解釈されている。このことは、心理学における複雑性トラウマの議論とも親和的である(ただ、直接、集合的トラウマに言及したものはない)。言い換えれば、第一の方向は、集合的トラウマの個人化がなされた流れであると整理できる。

第二の方向は、集合的トラウマと部分的に距離を取りながら、社会構築主義の側面から再概念化しようという流れである。この議論において、集合的トラウマはややねじれた評価を受けている。確かに、集合的トラウマは、個別的、心理的、身体的トラウマよりも、文化や社会の側面に先駆的に目を向けたという点で評価されている¹⁶⁾、¹⁷⁾。ところが、洪水災害やそれがもたらす個別的・集合的トラウマがあたかもそれ自体で自存するものであるかのように描く記述に対して批判がなされている。文化的トラウマの論者の一人であるアレクサンダーのエリクソン批判は、手厳しいものである。

何よりもまず出来事は、集合的トラウマをそれ自体で創り出すことはない。出来事は根源的にトラウマティックではない。(p.8)¹⁸⁾

つまり、トラウマが社会的なものとして切り離せないことを強調したことを評価しつつも、エリクソンの記述は、素朴な意味での自然主義に留まっており、社会構築の観点が欠落しているという批判である。具体的な批判を挙げておけば、歴史的トラウマの論者からは、集合的トラウマは、世代間や歴史的な影響が考慮されにくいこと¹⁹⁾、文化的トラウマの論者

からは、集合的トラウマと個別的トラウマは相互に依存的であるが、文化的トラウマは人種的、国民的アイデンティティに根ざす構築的なものとして区別される²⁰⁾といった形で批判されている。災害発生後から日常生活へと戻っていく過程で集合的トラウマが国民的トラウマを進行させるという関係²¹⁾にあるという記述もあるものの、総じて、エリクソンへの批判は、災害やトラウマそれ自体の社会構築的な側面の欠落に集中している。

この意味で、第二の方向においては、集合的トラウマはむしろ、社会構築主義に強く引き寄せられる形で再解釈されている。言い換えれば、第二の方向は、集合的トラウマの社会化がなされた流れと整理できるだろう。

現代的な（特にアメリカにおける）エリクソンの「集合的トラウマ」は、二次的トラウマ、敷衍して言えば、複雑性トラウマの一例としてみなされたり（集合的トラウマの個人化）、自然主義的なものとして批判の対象としてみなされたり（集合的トラウマの社会化）している。では、「集合的トラウマ」は、もはや現代の文脈においては、批判を受けてばかりで、あえて使う意義を見失った概念なのであるか。その意味で、同じ社会学に位置づけられる「集合的トラウマの社会化」の流れは、集合的トラウマを現代の文脈で問い直す上で有益な批判であるといえる。

そこで、この集合的トラウマを現代の文脈で引き受けるための道筋として、集合的トラウマの社会学的批判を引き受けつつ、しかしながらそういった批判を受けていけばバランスを取る形で集合的トラウマ論を修正するのではなく、『Everything in its Path』で示されている二つの主な特徴を徹底させるための二つの戦略を提示したい。

一つ目は、災害を出来事としてではなく、アメリカの災害社会学において古くからある災害をプロセスとして扱う災害観^{22), 23)}を徹底することである。つまり、災害それ自体は、時間的・空間的に局所的な「出来事」というモノの扱いを受けるのではなく、制度やシステム、社会構造を破壊していく「プロセス」として扱われるべきであるという見方を徹底することである。自然災害は、たしかに災害因をトリガーとして発生する。しかし、災害因（ハザード）そのものが災害ではない。その災害因が、人間社会においてどのような影響をもたらすか、もたらしていくかという構築過程そのものが災害なのである。このことの不徹底が、エリクソンが集合的トラウマ

を扱う上で、社会構築主義者からの自然主義批判を生み出したと考えられる。この第一の戦略は、災害をプロセスとして把握する社会構築主義を引き受けることになる。

二つ目は、災害をナショナルなレベルだけで表象されるものではなく、そして、個人において表象されるものでもない、いわば「メゾ」レベルの視点で捉えることの不徹底である。国民的・文化的トラウマにおいて考察の対象となっているホロコーストや同時多発テロ、そうしたものがもつナショナルなレベルでのトラウマは確かに否定できない。しかし、それと同時に、ナショナルなレベルでのいわば「強い」災害が抑圧していくローカルなレベルで共有される「弱い」災害もまた存在する。個別具体的な個々の物語や被災者の集団間で共有され、生成・消滅していくような弱い災害の分析にはあまり関心が向けられていない。

第二の徹底としてなされるべきは、このナショナルなものへと構築される災害の手前について問い直すということである。ナショナルなレベル構築されるものとは違った水準、つまり、あるコミュニティの手によって構築され、そしてときには崩壊してしまうような災害（の表象）について扱う水準を把持することが、集合的トラウマを現代の文脈で考える上で重要である。事実、「阪神・淡路大震災」（あるいは「東日本大震災」や「南海トラフ」といった名称で特定の災害を日本というナショナルなレベルで名指すことのできる社会が形成されたのは1970年代以降、すなわち「関東大震災」の記憶が（再）定着した後の社会であるという⁶⁾。このことは、このナショナルなレベルで語られる「災害」とは異なる水準の災害が存在しうることを示している。そして、このメゾレベルで捉えられる「災害」は、ローカルなコミュニティで共有される集合的トラウマを捉える上で重要な視座を提供する。

次節では、こうした議論を踏まえ、集合的トラウマの具体的な事例として、日本の文脈を採り上げる。もちろん、バッファロー・クリークで概念化された集合的トラウマがあらゆる文脈で適用可能だと考えているわけではないが、その射程は、単にバッファロー・クリークにとどまるわけではないということは少なくとも示されるべきだろう。

4. 現代の日本における集合的トラウマ

集合的トラウマは、個人的なトラウマの集合（体）ではなかった。たしかにエリクソンは、集合的トラ

ウマを引き受ける主体について踏み込んだ議論をしていない。しかし、今改めて踏み込んでみると、ここで言うトラウマは、純粹に個人の心のうちにあるものではないし、純粹な社会構築物でもないということが読み取れる。このような個人だけでも社会だけでも存在しているわけではない人間が破滅的な影響を受けたとき、個人としての心的影響のみを見るのではなく、社会としての心的影響を見るだけでもない、包括的な視点が必要となるは言うまでもない。このような視点に立脚しているのが集合的トラウマである。

本稿でこれまで述べてきた集合的トラウマは、人間存在に不可欠な共同性（コミュニティ）を喪失することによって生じるトラウマであった。すなわち、人間が人間として生きるうえで切っても切り離せないものとしての共同性が喪失したことを意味する。人間存在の一部としての共同性の喪失である。

そこで、人間存在の一部としての共同性（コミュニティ）の喪失を理解するにあたって、本節では、日本の具体的な事例に引きつけながら、集合的トラウマが生じていると考えられる東日本大震災後の事例を（今後の事例研究が必要なことを承知の上で）展覧的に二つ挙げておきたい。一つ目は、津波によってふるさとが洗い流され、さらにその後の大規模な区画整理と盛り土による「風景の喪失」である。二つ目は、福島第一原発事故によって生じた各地に離散した長期避難者が直面する「ふるさとの喪失」である。

一つ目の「風景の喪失」を採り上げてみよう。東日本大震災は、最大遡上高40メートル以上の大津波によって、多くの街が流された。その浸水面積は、561km²にもおよび²⁴⁾、東京23区の9割分にも達した。また、その後の復興工事における盛り土によって、いわば、被災者にとって喪失したふるさとがさらに覆い隠されるという事態が生じた。震災後に東北に移り住んだ瀬尾²⁵⁾は、このときの様子がある被災者の語りに仮託して、以下のように描写している。

「めちゃくちゃに色んなものを失くしてから三年経ってさ、まだ失くすものがあるなんて、思いもしなかったよねえ。色んなもの、これからも失くすんだよねえ。」（p.189）

津波とその後の盛り土は、ふるさとの風景を喪失させた。それは、震災前に風景を見ていた時のなにげない感覚と一緒に喪失したことを意味する。「なにげなさ」とは、端的に言えば、非意図的に感受され

る日常性のことである。そして、ここで言う風景とは、非意図的に享受していた、そうであるがゆえに失ったときにはじめてそれを意識するような性質を持っていたものである。

これはまさに、本稿で論じようとしてきた共同性の要件を成す。自分が生まれてから、疑うことなく享受していたがゆえに、まさに自らの一部となっているものである。このようななにげなく接していた風景を失うという経験こそが、集合的トラウマの本質的な部分であり、自己の喪失をも形成している。

次に、二つ目の、福島第一原発事故によって故郷を追いだされた人々にとってのふるさとの喪失について述べよう。それは2019年11月時点で3万1148人が依然として避難生活を送っている²⁶⁾という夥しい数の県外避難者が抱える喪失でもあり、県外避難から県内に戻ってきた人、あるいは残り続けるという判断をせざるを得なかった人も抱える問題である²⁷⁾。これもまた、ふるさとを追い出されて慣れない環境での新生活への苦悩というように単なる環境の変化として矮小化してしまうのではなく、ふるさとのつながりを失うことで生じた集合的トラウマの一つと見るべきだろう。

強制避難の問題は、遠いところに引っ越さざるをえなくなったという物理的な距離によるというよりは、たとえふるさとのすぐ近くに避難するだけでもかかったとしても、もはやそこがもとあった共同性を映し出す共同体では無くなってしまっているという心理的な距離感にある。EiiPが復刊した際に書き足されたプロローグで、エリクソンは、以下のように記している。

多くの人〔被災者〕は、かれらがもともと住んでいた家から数時間運転すればたどり着くくらいのところに住んでいた。それでも、その間、自身のことを「難民」として表現している避難者の数の多さに驚かされる。[...] たとえかれらが家から声の届くくらいの距離にいたとしても、まるでそこから遠く離れた場所にいるかのように語るのである。（pp.viii-ix）

自らがふるさとの残るという選択をしても、周りの人たちのうちの何割かは避難という選択をする。そのように歯抜けになってしまった「共同体」は、見かけよりも大きなダメージを負っている。なぜなら、震災前に意思以前のつながりがあった共同体を震災後に回復しようとするとき、そこには意図（そこに残るか残らないか）が必然的に介在してし

まうからである。それゆえ、被災した人びとがもともと生まれながらに保持されていたつながり（地縁と言ってもよいだろう）は、復興過程で新たな共同体を再建することだけでは自動的に回復されないのである。

災害が風景やふるさとを破壊すると言うとき、それは物理的に共同体が一掃されるということのみを意味しない。それは、生まれながらにしてなにげなく享受していた風景の喪失による自己の喪失であり、ふるさとになにげなく暮らしてきた人びとの生活の基盤であるつながりを破壊するということをも含意している。このことが、共同体ではなく、あえて共同性communalityという言葉を用いてエリクソンが言おうとしたことの本質なのである。

5. まとめ

ここまで、EiiPにおいて提出された「集合的トラウマ」を巡り、この概念とそれに続く議論を紹介し、さらに、日本の文脈で理解するための補助線を提示した。ここで、簡単に、議論をまとめておけば、集合的トラウマとは、一般的な理解におけるトラウマ（心的外傷）つまり、個別的トラウマindividual traumaとは異なり、個人が依拠する共同体との結びつきの喪失がもたらす外傷を指している（2節）。次に、集合的トラウマは、心理学的には（個別的）トラウマの二次的な症状として位置づけられ（集合的トラウマの個人化）、社会学的には社会構築主義における歴史的・国民的・文化的トラウマと比較し自然主義に陥っていると批判されてきた（集合的トラウマの社会化）（3節）。その上で、集合的トラウマを個人の「心理」や当事者から過度に逸脱した「社会」に帰すことなく、被災地がかかえる共同性communalityに着目することで、東日本大震災後の嵩上げ工事や福島原発事故の故郷喪失といった日本の問題において「集合的トラウマ」が現状に目を向ける有用な概念であることを述べた（4節）。

最後に、本論文の限界について3点触れておきたい。第一に、採り上げた東日本大震災の二つの事例は、あくまでも総論的な議論であり、現場に根ざした事例研究とは言えない。特に、集合的トラウマを単に共同体（コミュニティ）の傷という概念に矮小化させ、どこでも通用し、診断するための概念にしてはならない。本論文では、日本の事例の解釈を丁寧に述べてきたが、それはEiiPの議論を逸脱しない範囲に留めるよう務めた。第二に、バッファロー・クリークでの濃密な共同体とは異なる現代的な（例えば、

移住者とかネット上の）共同体や、違う日本の文化圏・異なる災害においてもこの議論が妥当するかは、本書から読み取することは困難である。

そして第三に、本稿ではエリクソンが提示した「集合的トラウマ」の紹介に留まっており、十分に先行研究との対比が十分にできなかった。とりわけ、共同体（コミュニティ）の喪失に関する議論⁽⁴⁾は数多くなされている。その意味で、今後の研究ではそうした議論と「集合的トラウマ」概念との異同、本概念でなければ捉えられないことなどについて理論的検討が必要である。

無論、この3点は限界であるが、一方で、より詳細な事例研究を進めることが求められているとも言える。そして、著者らは、集合的トラウマを検討することで、復興において「物ではなく人のつながりが大事だ」といった議論を補強することを意図していない。4節でも触れたように、集合的トラウマを巡る議論は、物理的な建物だけでも、人間関係だけでもない、人々のアイデンティティをささえる全体的なもの、いわば「風景」とでも呼びうるようなものに関わっている。

それでも、最後に、集合的トラウマは単にバッファロー・クリークという個別の事例にとどまらない普遍的な概念として可能性を秘めたものであるということを目指したい。実際、日本国内において、ひとびとのアイデンティティをささえる共同体そのものが、域外の避難によって喪失・壊乱されたり、復興事業による嵩上げによって元あった町の輪郭が徐々に喪われたりする事態が現実起こっている。その点で、われわれが普段あまりに当たり前接しているがゆえに、仮に失ったとしても名指すことのできない何かについて、集合的トラウマは今後十分に精査されるべき概念であると言える。そして、それとともに、集合的トラウマは、復興研究において新たな視座を提示してくれる概念である。

6. 謝辞

本論文の内容は、日本質的心理学会第16回大会でのワークショップ「今こそカイ・T・エリクソン『Everything in Its Path』を読み直す」の発表をもとに、加筆したものです。当ワークショップにおいて、指定討論者の宮地尚子先生・高森順子先生、および会場の皆様から示唆的なコメントを頂きました。ここに記して感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費19J00055、20H01568の助成を受けたものです。

補注

- (1) 蛇足ではあるが、父のエリック・H・エリクソン (1902-1994) は、「アイデンティティ」概念や、心理社会的発達理論を提唱したことで著名な、アメリカの発達心理学者・精神分析家である。
- (2) 一般に知られる「外傷後ストレス障害 (PTSD)」ではなく、ここでは症状を指す「PTSS」が挙げられている。
- (3) 例えば、日本において水出は、『〈災後〉の記憶史』²⁸⁾という書籍の中で、現代の「関東大震災」の集合的記憶は、「防災の日」の社説で関東大震災に言及するという形式が定着したために1970年ごろに定着したものであり、1960年以前の「関東大震災」の集合的な記憶とは異なるものであると指摘している。
- (4) 共同体(コミュニティ)の喪失に関する研究としては、例えば、植田今日子氏や関礼子氏の研究^{29), 30)}が挙げられる。

参考文献

- 1) Erikson, K. (1976=2006). *Everything in its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*. Simon & Schuster.
- 2) カーディナー, A. 中井久夫・加藤寛 (訳) (2004) . 戦争ストレスと神経症 みすず書房
- 3) リフトン, R. 榊井迪夫・湯浅信之・越智道雄・松田誠思 (訳) (2009) . ヒロシマを生き抜く: 精神的考察 岩波現代文庫
- 4) Lifton, R. (1973). *Home from the War, Vietnam Veterans: Neither Victims nor Executioners*. Basic Book.
- 5) エリクソン, K. 権田建二 (訳) (2000) . トラウマと共同体に関する覚書 カルース, C. (編) 下河辺美知子 (訳) トラウマへの探求 作品社 (pp.271-297)
- 6) Visser, I. (2011). Trauma theory and postcolonial literary studies. *Journal of Postcolonial Writing*, 47(3), 270–282.
- 7) e.g.) Neal, A. (1998). *National trauma and collective memory: Major events in the American century*. Routledge.
- 8) e.g.) Mohatt, N., Thompson, A., Thai, N., & Tebes, J. (2014). Historical trauma as public narrative: A conceptual review of how history impacts present-day health. *Social Science & Medicine*, 106(1), 128–136.
- 9) e.g.) Alexander, J., & Eyerman, R. (eds.) (2004). *Cultural trauma and collective identity*. University of California Press.
- 10) David, E. (2010). “Studying Up” on Women and Disaster: An Elite Sustained Women’s Group Following Hurricane Katrina. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 28(2), 246–269.
- 11) Gill, D. A. (2007). Secondary trauma or secondary disaster? Insights from Hurricane Katrina. *Sociological Spectrum*, 27(6), 613–632
- 12) 大門大朗・瀝美公秀 (2019) . アメリカ災害社会科学の系譜と研究動向: 災害研究センター (DRC) を中心とした歴史的背景から 災害と共生, 2(2), 15–40.
- 13) Erikson, K., & Peek, L. (2011). *Hurricane Katrina Research Bibliography*. Social Science Research Council Task Force on Katrina and Rebuilding the Gulf Coast Hurricane.
- 14) Gill, A. (2007). 同掲書
- 15) Paxson, C., Fussell, E., Rhodes, J., & Waters, M. (2012). Five years later: Recovery from post traumatic stress and psychological distress among low-income mothers affected by Hurricane Katrina. *Social Science & Medicine*, 74(2), 150–157.
- 16) David, E. (2008). Cultural Trauma, Memory, and Gendered Collective Action: The Case of Women of the Storm following Hurricane Katrina. *NWSA Journal*, 20(3), 138–162.
- 17) Visser, I. (2011). 同掲書
- 18) Alexander, J., (2004). Toward theory of cultural trauma, Alexander, J., & Eyerman, R. (eds.) *Cultural trauma and collective identity*. University of California Press (pp. 1-30).
- 19) Mohatt, N. et al. (2014). 同掲書
- 20) Eyerman, Ron (2015). *Is This America?: Katrina as Cultural Trauma*. University of Texas Press.
- 21) Neal, A. (1998). 同掲書
- 22) Barton, A. (1963). *Social Organization Under stress: a sociological review of disaster studies*. Washington, DC: National Research Council.
- 23) Quarantelli, E. (1966). Organization under stress. In R. Britson (Ed.), *Symposium on Emergency Operations*. (pp. 3–19). Santa Monica, CA: Systems Development Corporation.
- 24) 内閣府 (2011) 今回の津波被害の概要 <http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/1/pdf/3-2.pdf> (最終アクセス日 2019年11月29日)
- 25) 瀬尾夏美 (2019) . あわいゆくころ: 陸前高田、震災後を生きる 晶文社
- 26) 福島県 (2019) . 福島県から県外への避難状況. <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/359577.pdf> (最終アクセス日 2019年12月2日)
- 27) e.g.) 小川紀子 (2019) . 福島原発事故後県外避難を経験した乳幼児を育てている母親の思い: 避難前・避難中・福島県に戻ってから 日本赤十字看護学会誌, 19(1), 11-20.
- 28) 水出幸輝 (2019) . 〈災後〉の記憶史: メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風 人文書院
- 29) 植田今日子 (2016) . 存続の岐路に立つむら: ダム・災害・限界集落の先に 昭和堂
- 30) 関礼子 (2018) . 被災と避難の社会学 東信堂